

## 受難第4主日礼拝 説教 「生活の中にあるもの」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年3月14日

### 出エジプト記 24章3～11節 マタイによる福音書 17章1～13節

受難節第4主日を迎え、受難節の歩みもいよいよ折り返し地点を過ぎました。そこで私たちが見つめるものは、もちろん、十字架の主の御苦しみであります。ただ、この時の私たちにとって、主の十字架は希望の徴としてその目に映し出されているのでしょうか。過ぐる3月10日は、10万以上の人々の命を奪った、東京の下町地区に壊滅的な被害を与えた東京大空襲のあった日です。また、翌日の3月11日は、2万人あまりの人々の命を奪った東日本大震災の起こった日でもあります。そして、甚大な被害を与えたこれらの出来事が、今日を生きる私たちにとっても決して無関係なものではないように、この一週間、私たちが強く感じたことはこの世の無常でもありました。つまり、コロナ下にあって不自由を強いられながらも、なんとか生活を維持している私たちのこの暮らしが、いつ底が抜けたとしてもおかしくはないということです。

しかし、私たちの多くは、この危険性を常に意識しているわけではありません。そして、それは、もしかしたら、主の十字架の苦しみも同じなのかもしれません。それぞれの事の本質をよく知っているし、分かっている。けれども、常にそれを思い続けることまではしていない。していないというよりも、できない。それは、一つには、私たちが忘れっぽいからでもあるのでしょうか。けれども、忘れずにいつまでも覚え続けているということが、本当に私たちにとって幸せなことなのでしょうか。事柄の重さゆえに押しつぶされ、それこそ生活もままならないことが起こりうるのです。そして、そこから分かることは、私たちが何かを知り、分かるということは、事柄によっては、心に蓋をして、しまい込むしかない、そういう一面を持っているということです。けれども、それは私たちにとっては決して忘れてはならない大切なことでもあります。ですから、それを忘れずにいるためにも、時と場所を定めて思い起こすことは大切なことです。それゆえ、大切なことを思い起こすことは、暗証番号やパスワードを思い出すこととはわけが違

ます。覚えるということ、思い出すということ、忘れずにいるということは、情報をいかに処理するかという問題ではなく、私たちがこうして生きていることすべてに直結するものであり、それゆえ、どういう形であれ、私たちの暮らしに秩序を与えることになるのです。

ですから、私たちがこれからも秩序ある暮らしを続けていくためにも、心にしまい込みたくなるこの大切なことを繰り返し覚え続ける必要があるのです。そして、その時と場が私たちにとっての礼拝です。なぜなら、今日の出エジプト記にも記されているように、礼拝は、私たちに過去の記憶を呼び覚ますだけでなく、荒野での40年の旅路を導いた神様の御手の働きが、将来にわたっても変わらずに続いていくことを告げ知らせるものであるからです。それゆえ、この神様の御手の働きは、私たちに調和と安定、つまり、秩序ある暮らしをもたらすことになりません。そして、それが、冒頭で語られている、私たちが「一つである」というこの事実によって現されてもいるのですが、従って、御言葉が語るこの「一つである」ということは、それゆえ、観念的、理念的な形で終わることはありません。頭の中でいかようにも好き勝手にできるものではなく、出エジプト記の最後のところで、「彼らは神を見て、食べ、また飲んだ」とあるように、具体的に恵みとして与えられ、それも、一塊となって、この神様からの恵みを分かち合うことになるのです。

ですから、当然、そこには人によって差があってはなりません。イエス様の五千人の供食の出来事にあるように、すべての人々が同じように満ち足りることになるのです。そして、それが、聖書の語るころのメッセージでもあります。それについては、私たちはよく知っていることでもあるのでしょうか。それは、これまで繰り返し繰り返し聞いてきたことですし、これからはずっと聞き続けることだからです。ですから、私たちにはそれが十分に知っているし、分かっている、

けれども、この繰り返し聞き、また聞くことになるものに、この時、齟齬が生じていると、私たちをしてそう感じさせるのはどうしてなのでしょう。それは、主の十字架の出来事と、75年前に起こった悲惨極まりない出来事と、そして、私たちの記憶に今も新しい10年前の出来事と、この三つの出来事を心に留めつつ主の御前に集う私たちにとって、御言葉は、私たちの心を満たし、本当に心から良かったと思わせるものではないからです。つまり、一つでありながら、一つではない、そう思わされているのがこの時の私たちであるということです。そして、そのため、安全と安定が約束されている人々は余計に負い目を感じ、また、わだかまりを強くすることにもなるでしょう。

ですから、レントの時を過ごすその私たちが一番心に蓋をしたいことは、そもその原因である主の十字架の出来事なのかも知れません。それは、十字架は神の独り子が神ご自身によって見捨てられたという事実を伝えるものだからです。それゆえ、3月10日は人間の命の尊厳を踏みにじるだけでなく、その被害者に消すことのできない痛手を負わせ、しかも、神様はそれを見ているだけで何もなさらなかった、するに任せたということです。つまり、神の非情さ、無力さ、まさに神なき世界を現す出来事であったということです。そして、3月11日は、自然災害だから仕方ない、ということではなく、穏やかで平穏に暮らしていた人々の暮らしを徹底的に破壊し尽くすものであり、つまりは、徹底して神様の無能さを知らしめる出来事であったということです。それゆえ、これらのものが合わさって私たちに伝えることは、私たちと神様との関係が徹底して断絶しているということです。ですから、そう考えると、神共にいます事実を伝えるイースターの出来事は、神様との断絶に焦点を当てる人々にとっては幻想に過ぎないと言えるでしょう。それゆえ、そうした人々の影響を受けた私たちがこれらの三つを重ね合わせてこうして御言葉に聞いていくことは、私たちの神様への期待を徹底して挫くことにもなるでしょう。ところが、神様もイエス様も、その私たちに向かって、そのような私たちだからこそ、なお、信じ、信頼し、御言葉の実行を強く求める

のです。それは、過去の人々がそうしてきたからという、そういう単純な話からではありません。もちろん、大きな視点に立つならそういうことも言えるでしょう。けれども、神様とイエス様がこうして御言葉を通して私たちに信じ、信頼することを求めるのは、複雑な過去を昔の人たちはこう整理したと、信仰をあたかも教訓のように告げ知らせたいからではありません。

私たちは暮らし続けなければならないし、生き続けねばならないのです。そして、この私たちの命は神様が与えてくださったものであり、その命を共に歩み、支え、守り導いてくださっているのが神様であり、イエス様であるのです。従って、それが私たちであり、それが人間である以上、この神様との繋がりを欠いて、私たちは生きていくことはできません。私たちクリスチャンは、聖書のメッセージをそのように受け止めているのです。まただから、信じ、信頼することを神様は私たちに求めるのですが、そこで、先週のイエス様の御言葉とこのイエス様の言葉を聞いたペトロの姿を思い起こしていただきたいのです。それは、ペトロの信仰を喜んだイエス様が、その直後には、そのペトロのことをサタンと呼んでいるということです。そして、ここでの出来事について御言葉は、それから6日後のことであったと語るのですが、その間、何があったかは分かりません。分かりませんが、ここでは、イエス様にサタンとまで言われたペトロと、イエス様のこの怒鳴り声を聞いた他の弟子たちの中からヤコブとその兄弟ヨハネだけがイエス様に連れられて、高い山に登ることになったわけですが、そして、そこで彼らは神々しいままのイエス様を見ることになります。御言葉はその時の様子を「顔は太陽に輝き、目は光のように白くなった」と語るのですが、今度はそこにモーセとエリヤが現れ、イエス様と楽しそうに語り合う姿を目撃することになるのです。イエス様からサタンと呼ばれたペトロはその時相当落ち込んでいたはずですから、この特別な恵みに与ったことは、天にも昇らんばかりの気持ちでもあったでしょう。そして、それは、ペトロだけでなく、他の二人も同じです。そして、この気持ちは私たちも同じです。ですから、ここに仮小屋を建てましょうとペトロが思わず口に

したことは、人としての自然な振る舞いだと言えるでしょう。

しかし、それが許されたのは、12 人いる中でこの 3 人だけでした。つまり、限られた人々だけであったということです。これについて、皆さんはどうお思いでしょうか。一つ、一塊と御言葉が語りながら、実は、ということが実際に起こっているということです。戦争の被害、地震の被害も同様です。ですから、それを知っている私たちは、転ばぬ先の杖ではありませんが、そういう苦しみに与らないように強く願い、祈りを篤くするのです。ただし、その願い、祈りが聞かれる場合もあれば、そうでない場合もあります。そして、ここで明らかにされていることは、その決定がイエス様と神様に委ねられているということです。三人が選ばれたのはイエス様にすべての裁量が任されていたということであり、つまりは、ここでのことは、そのイエス様の自由な振る舞いの結果であるということです。従って、選ばれた者は、ここでもそうですが、大喜びをするわけです。けれども、そうでない者はどうか、ここではそれについては触れられてはおりませんが、イエス様の自由な振る舞いが、人を喜ばせると同時に、人を深く傷つけるものでもあるのは間違いありません。そして、この直前では、このイエス様の自由な振る舞いによってペトロは深く傷つくことになりました。ところが、ここでは今度はその逆のことが起こっているわけです。ですから、ここでの出来事に深い共感を覚える人たちは、どうしたら、この恵みに与ることができるのか、自分は傷つかずに済むのか、傷ついた心をどうしたら癒やしてもらえるのか、その方法を知り、また分かろうとするのです。そして、その方法こそが、飛び上がらんばかりに喜ぶペトロの発言の中に現されていることでもあるのです。つまり、それが、恵みを握りしめ離さないためにはいかに振る舞えばいいかということでもあります。この、離すまいとの思いこそが、恵みを自分の自由にしたいとの現れでもあるのです。そして、私たちがそう思うのは、ペトロがそうであったように、傷つくことの痛みを深く知っているからです。けれども、御言葉はそこで何を私たちに伝えるのか、そうは問屋が卸さないということです。

イエス様の自由な振る舞いは、時に私たちに深く傷つけます。そして、それは、神様と同じです。独り子を十字架にかけるといふところに、神様の自由な振る舞いの非情さが表されているとも言えるからです。ただ、もちろん、神様とイエス様のなされることはそれだけではありません。このことはつまり、この神様とイエス様の自由な振る舞いによって、私たちは、人生において喜びに与る事もあれば、その逆を経験することもあるということです。そして、その逆の経験を思い起こさせられているのがこの時の私たちでもあります。そうであるからこそまた余計に、気持ちのいい思い、心地いい思いを、ちょうどここでのペトロのように、それを掴み取ろう、掴み取ったものを絶対に離すまい、とそう思ったりもするのでしょうか。そして、それは、私たちが深い傷を負った経験があるからでもありません。けれども、気持ちいい思いも気持ちの悪い思いも、私たちの目を曇らせ、塞ぐものであることに変わりはありません。ここでペトロが神々しいまで光り輝く雲に視界を奪われたように、いずれにせよ、この見えないといふところに、ペトロが居心地の悪さを感じたのは間違いないからです。けれども、もしペトロが仮小屋を建て、神々しいまでに光り輝くこの三人が仮小屋に収まってくれているら、どうだったでしょうか。居心地の悪さを感じることはなかったはず。そして、この居心地の悪さをペトロに求めたのが神様でもありました。けれども、そこで天より発せられた言葉が「これは私の愛する子、私の心に適う者、これに聴け」との神様の声、言葉でありました。

そして、レントを過ごす中で私たちが聞いているものがこの神様の声でもありますが、そこで、私たちがこの先に見つめるものを考えたいのですが、それが主の復活の出来事です。それゆえ、毎年私たちは、イースターを祝うことで神様の御心を知るのです。ただし、この神様の御心はそれを知って終わるものではありません。つまり、十字架の苦しみというモヤモヤしたものの答えが復活だと知って、また分かって、それで終わるものではないということです。それどころか、主の復活を知ることは、私たちがまだ何も分かってはいない、終わってはいないということを知らしめるものでもあるの

です。それは、イースターを祝うということが私たちの終わりではなく、私たちにとっては道しるべに過ぎないものだからです。それゆえ、ここで終わりだと思っていた人々にとっては、ガッカリさせられるものでもあるのでしょうか。けれども、ガッカリしようが、一息つこうが、御言葉が私たちに伝えることは、私たちの新しい歩みは、復活の主との出会いから始まっていくということなのです。そして、この私たちの歩みであります、それは、世の無常を知らしめるものでもなければ、神様の非情さ、その無能さを明らかにするものでもありません。主の十字架と復活の出来事は、神なき世界に生きる絶望と神共にいます希望との間に打ち込まれた楔のようなものであり、そのためにまた、私たちは神に過剰な期待を寄せてしまうのです。そして、それが自分の気持ちに溺れるということでもあります、けれども、その私たちがしっかりと神様の御心の上に立ち、この御心に聞きながらこれからを歩み続けるなら、私たちは神共にいます希望に与ることにもなるのです。

従って、そのために知らしめられたものが主の十字架と復活の出来事でもあります、このように、今日のそれぞれの御言葉は、この立ち続ける、歩み続けるという視点をもって私たちに語られているものでもあるのです。それは、私たちがこれからを希望をもって歩み続けるということが決して無秩序なものではなく、また、思いつきの行き当たりばったりものではないからです。そして、それを知らしめるものがイエス様のこの「起きなさい。恐れることはない」との御言葉なのです。なぜなら、私たちの多くは、自分が知り、分かることのできる範囲に神様の御心を閉じ込め、この御心を自由にしたいとの思いに捕らわれ、そのためにまた目が塞がれてしまうからです。けれども、そう思うことは勿論いけないことではありません。なぜなら、まさにそういう私たちに寄り添い、離れずにいるのがイエス様であり、神様であるからです。しかし、神様が寄り添ってくださるということは、私たちの都合だけを満たせばいいということではありません。私たちは想定外の出来事に見舞われることはありますし、それがまさに生きている、生きるということでもあるのです。けれど

も、イエス様はこの想定外の出来事の中にも私たちと共にいてくださっているのです。

イエス様がペトロ、ヤコブ、ヨハネに言いたかったことは、「起きなさい、恐れるな」とのこのお言葉の中に現されています。つまり、私はここに居る、ということなのです。いつもと変わりなく、私たちに手を置き、呼びかけてくださるイエス様がどんな時にも私たちと共にいてくださっているということなのです。それは、十字架にかかったその時も、3月10日も3月11日も、私たちが身の危険を感じ、それどころか、不慮の事故、突然の病など、私たちが想定外のこととして自分の考えや思いの外に置いている出来事の中にも、イエス様は私たちと共にいてくださっているのです。まさに、自由に、思いやり深く、私たちとどこまでも共にいてくださるお方、それが私たちのイエス様であるのです。それゆえ、そのイエス様は、私たちが囚われから解放してくださいます。自分の気持ちや考えに囚われ、溺れる私たちのことを、まさに、イエス様がそうであるように、深く傷つきながらも、神様が造られたこの世界を自由にのびのびと生きることができるようにと、共にある私たちのことをどんな時にも支え導こうとされているのです。そして、その私たちが導かれるその先は天の御国です。だから、今は分からないことでも、御国に入る日、私たちはすべてを知ることになるのです。ですから、その私たちににとって大事なことは、知ろうとすること、分かろうとすることよりも、分からない、知らないとの思いをイエス様に信頼しつつ、大事に抱え続けることです。そして、それが私たちに許されているのは、「起きなさい、恐れることはない」とのイエス様の呼びかけを日々聞いているからで、私たちがそれを一つとなつて、一塊に聞いているからです。つまり、私たちににとっての一大事は、イエス様がここにいますということなのです。いるだけでなく、共にいますがゆえに、イエス様は私たちのことを導かれるのです。そして、それは、終わりまでです。祈りましょう。